慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Émile Benveniste, Dernières leçons : Collège de France 1968–1969 (Édition établie par Jean-Claude Coquet et Irène Fenoglio, Seuil / Gallimard, 2012)
Sub Title	
Author	小野, 文(Ono, Aya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.55 (2012. 10) ,p.57- 63
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20121019-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

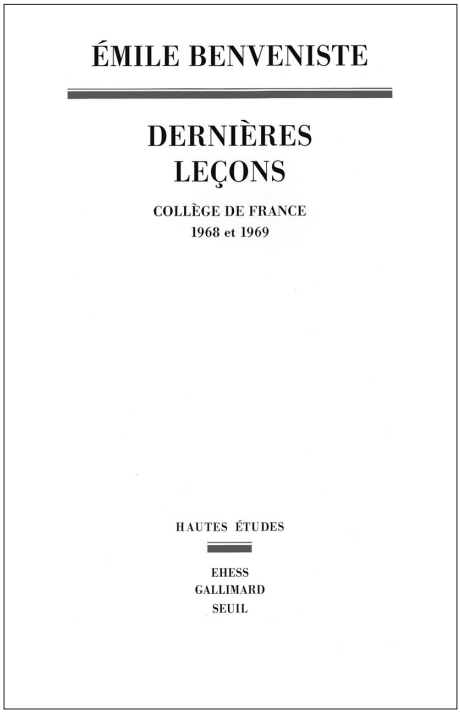
Émile Benveniste, *Dernières leçons : Collège de France 1968–1969*
（Édition établie par Jean-Claude Coquet et Irène Fenoglio, Seuil / Gallimard, 2012）

小　野　　文

バンヴェニスト（再）発見

近年、言語学者エミール・バンヴェニストの残した手稿とそれに関する論考が相次いで出版されている。2004 年にパリ国立図書館東洋セクションの東洋学者文庫のなかに大量の草稿が「発見」されてから、草稿研究を専門とする言語学者を中心に研究チームが構成され、残されたノートやメモ類の分類・読解・出版に取り組んでいるためだ[1)]。そのなかでも特筆に値するのが 2012 年 4 月に刊行された Émile Benveniste, *Dernières leçons : Collège de France 1968–1969* であろう。ここには 1968 年から 1969 年にかけてコレージュ・ド・フランスでなされた計 15 回の講義が収められている。1968 年と言えば、バンヴェニストの知的活動が最も盛んであった時期であり、それは 1969 年暮れに突然、脳梗塞で倒れ、失語症を発症するまで続く。その旺盛な活動を証明するように、講義の内容は多数の言語に題材を求めながら「記号学」「ラングとエクリチュール」「意味」という主題を巡って、バンヴェニストの集中力の高まりが感じられるようなものとなっている。

1）研究チーム « Génétique du texte et théories linguistiques » はフランス国立科学研究センター（CNRS）の草稿研究院に属する。主任研究員のイレーヌ・フノリオは、今回紹介する著作 *Dernières leçons* の編者の一人でもある。


ÉMILE BENVENISTE

DERNIÈRES
LEÇONS

COLLÈGE DE FRANCE
1968 et 1969

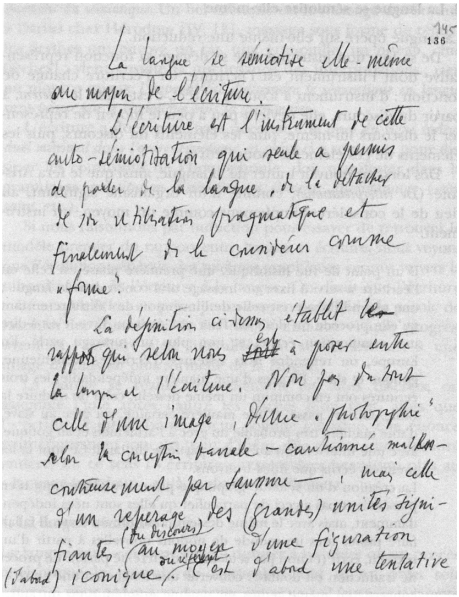
HAUTES ÉTUDES

EHESS
GALLIMARD
SEUIL

Dernières leçons は、残された講義メモを整理して活字としただけではない。メモそれ自体では講義の内容を再現できないと考えた二人の編者、ジャン＝クロード・コケとイレーヌ・フノリオは、当時コレージュ・ド・フランスでバンヴェニストの講義を実際に受けていた言語学者たち（一人はコケ自身、後の二人はクローディーヌ・ノルマンとジャクリーヌ・オティエ＝ルヴュ[2)]）の講義ノートを編み込んで講義を再構成したのである。この作業は当然のことながら悪評高いバイイとセシェエ編のソシュール『一般言語学講義』の編集作業を思い起こさせる。しかしバンヴェニストの講義の場合、編者達のとった作業はもう少し繊細である。彼らはノートから再構成した部分と講義メモとを見やすく分けて、あらかじめ混同のないようにしたのである。また要所に講義メモのイメージをそのまま掲載し、バンヴェニストの筆跡や息づかいが伝わるように配慮している。

講義の再構成だけでなく、この著作にはバンヴェニストの交流のあった三人が文章を寄せている。前書きにジュリア・クリステヴァ、後書きにツヴェタン・トドロフが、そしてバンヴェニストの弟子かつ友人で、イラン語学

2）Claudine Normand, Jacqueline Authier-Revus は、それぞれパリ第 10 大学、パリ第 3 大学で教鞭をとった言語学者。


136

La langue se sémiotise elle-même au moyen de l'écriture.

L'écriture est l'instrument de cette auto-sémiotisation qui seule a permis de parler de la langue, de la détacher de sa utilisation pragmatique et finalement de la considérer comme « forme ».

La définition ci-dessus établit les rapports qui selon nous existent à poser entre la langue et l'écriture. Non pas du tout celle d'une image, dérive « photographique » selon la conception banale — cautionnée malheureusement par Saussure —, mais celle d'un repérage des (grandes) unités signifiantes (du discours) au moyen d'une figuration (d'abord) iconique. ; (est d'abord une tentative

Illustr. 21. Note d'Émile Benveniste (PAP. OR., boîte 40, env. 80, f° 136)

者ジョルジュ・ルダールが、付録1として「エミール・バンヴェニストの伝記と著作目録」を著し、バンヴェニストの生涯と思想、また個人的な思い出を語っている。また付録2には、エミール・バンヴェニストの遺した草稿に関する調査報告が挿入されている。編者による編集の方針と内容の紹介を記した導入部も、詳細かつ有意義な情報で満たされている。今回刊行された *Dernières leçons* は、結果として多様な文章を含んだ著作となり、多少散漫な感じがすることは否めない。しかし全体に目を通すと、編者のもう一つの意図が見えてくる。バンヴェニストの「最後の講義」の再構成というだけでなく、著名人による証言や解説を加えることで、この著作は「バンヴェニスト・リバイバル」とも言うべき動きを作りだそうとしているのだ。

エミール・バンヴェニストは20世紀言語学の巨人の一人であり、比較言語学と並んで一般言語学の分野で大きな足跡を残した言語学者である。また彼の言語学はとりわけ哲学・思想の領域で好んで読まれてきた。それにも拘わらず彼の名前は世界的に知られているわけではなく、フランス語圏やフランス文学・哲学を専門とする一部の専門家や学生にしか拡がっていない。同時代のローマン・ヤコブソンと比べても知名度は低く、非フランス語圏の言語学者にはバンヴェニストの名前を聞いたことのない者もいるほどである。これには幾つかの原因が考えられるが、一つの理由として、これまでこの言

語学者の生い立ちがほとんど語られることがなかったという事実が挙げられる。生前、バンヴェニスト本人も自分の生涯について多くを語ろうとはせず、人見知りする性格は、多くの友人や弟子を作らなかった。またバンヴェニストが失語症のために一切の知的活動を中断することを余儀なくされ、彼の言語学と言語思想全体がいわば未完成の形をとっていることも理由の一つと言えるだろう。

しかしながらこの「未完成の形」が、バンヴェニストの言語学とその言語思想に独特の吸引力を与えていることも事実である。私見では、バンヴェニスト自身が閉じることのなかった「問い」は、その強度ゆえ、読者を新たな読みに誘うものである。*Dernières leçons* に再構成されたバンヴェニストの講義もまた、道半ばで中断されている思考であるが、そこに展開されている問題は、現代の読者を引き込み、ともに考えることを促す問いである。おそらくバンヴェニストの草稿や講義ノートの公開は、この言語学者の隠れた生涯の発見に読者を導くだけでなく、すでに刊行されている著作、『一般言語学の諸問題』や『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集』の再読へと導くことにもなろう。バンヴェニストの言語学は、読み返すたびに新しい意味を生み出すスタイルを持っているからだ。*Dernières leçons* の二人の編者が目論んでいるのも正しくそこにあり、彼らは「バンヴェニストの現代性」と題する文章を導入部の最初に置いて、バンヴェニストの（再）読解を促している。

証言的要素

クリステヴァの前書きやトドロフの後書き、またジョルジュ・ルダールの「エミール・バンヴェニストの伝記と著作目録」に見られるように、また講義の準備メモを補完する形で当時の学生のノートが用いられていることからも、*Dernières leçons* は全体として「証言」の性格を持っている。これまで職歴や出版物などの情報は別にして、バンヴェニストの生涯やその人柄に関する証言は詳らかにされてこなかった。コレージュ・ド・フランスに残された教授記録、追悼記事、デュメジルのインタビュー等など、彼の個人的な側面を知るには非常に限られた情報しか私達は持ち得なかったのである。その

意味で、この証言の意義は大きい[3)]。

むろん、彼の言語思想や言語学理論と彼の生涯とは全く無関係だと言うこともできる。しかし彼の生きた時代、20 世紀は、一人の学者が全く政治や宗教、出自や生い立ちにとらわれずに何かを研究することを許さなかった時代であり、特に古いユダヤの家系出身で、インド = ヨーロッパ比較言語学を研究するということは、時代の紆余曲折に研究が振り回されざるをえないことを意味していた。また若い日にシュールレアリスム運動に触れ、リルケの『マルテの日記』の語り手に自らを重ねたと言われるバンヴェニストは、生涯文学への関心を失わなかったが、それは彼の言語思想にも現れていると言えよう。ルダールの遺した未完成の「伝記と著作目録」は、バンヴェニストの生涯と著作が結びついていることを示している。

証言から際立つのは、「ユダヤ人」としてのバンヴェニストである。バンヴェニストという姓自体、中世まで遡ることのできるユダヤの学者の家系だと言われる。オスマン帝国下のシリアはアレッポに生まれ、親元を離れ 11 歳でパリのラビ養成学校に入った少年は、しかしながら自らの意思で学校をやめ、文学と言語を学ぶために大学の文学部に入る。左翼知識人やシュールレアリスムに惹かれながらも、フランスで研究者として生きるために文法の教授資格を取り、フランス国籍を取得し、25 歳で高等研究実習院（École pratique des hautes études）の指導教授、35 歳でメイエの後を継いでコレージュ・ド・フランスの教授となる。しかし時代は反ユダヤ主義の色合いを強め、バンヴェニストも 1940 年に捕えられて労働収容所送りとなるが、奇跡的に脱出し、スイスの大学図書館の司書として終戦を迎える。終戦と同時に、アウシュヴィッツでの兄の死、資料全ての消失という絶望と失意を味わうバンヴェニストは、そこから立ち上がり、戦後は比較言語学の世界的な大家として評価を高めていくことになる。ソシュールの後継者と言われ、比較されることも多いバンヴェニストだが、ジュネーヴの学者が貴族出身で天才肌、

3）Roger-Pol Droit の筆による *Le Monde Livre*（2012 年 4 月 20 日付）の書評も、この証言部分を重要視している。

若くして「額に星を抱いて」[4] いたのと対照的に、バンヴェニストの修行時代は暗く、地を這いずるような模索と葛藤、そしてたゆみない努力に満ちている。

歴史家カルロ・ギンズブルグはジョルジュ・デュメジルの比較神話学を検証し、20 世紀前半の反ユダヤ主義と比較言語学、比較神話学の濃密な関係を指摘・糾弾している。こうしてバンヴェニストの生い立ちが明らかにされた今、バンヴェニストが学問の世界において、どのように反ユダヤ主義に対峙していったのか、その検証が行われるのはこれからと言えよう。そうした考察を可能にした点でも、バンヴェニストの生涯に関する証言と記録は評価されるべきである。

講義について

15 回の講義は、「記号学（Sémiologie）」と題されたものが 7 回、「ラングとエクリチュール（Langue et écriture）」に関するものが 8 回、そして病に倒れる前の最後の講義（実際には第一回講義なのだが）は「意味（Sens）」に割かれている。「記号学」の講義の内容は、バンヴェニストの論文《Sémiologie de la langue》（1969）や《Structure de la langue et structure de la société》（1968）に表されているものに相当し、また「意味」に関するものは、《La forme et le sens dans le langage 》（1966）の内容に相当する。それに対して「ラングとエクリチュール」に関する講義に相当する論文は発表されておらず、内容は初公開となる。

この 15 回の講義を通読すると、「記号学」「エクリチュール」「意味」それぞれの問いが、無関係に存在するのではなく、密接に関連しているのが見えてくる。1968 年から 1969 年にかけて、バンヴェニストは「ことばが意味する」とはどういうことかを集中して考えているのである。60 年代後半、発話行為という新たな概念装置を手にいれたバンヴェニストは、新しい言語学を構想し始めており、それがル・セミオティック（記号論領野）とル・セ

4）ソシュールを評したバンヴェニストの言葉。« Saussure après un demi-siècle », *Problèmes de linguistique générale*, 1, p. 36.

マンティック（意味論領野）の区別や、ことばの「形」を視覚的に捉えたエクリチュール（それは研究が未開拓の記号体系でもある）の研究へと繋がっている。私は一度、エクリチュールに関するバンヴェニストの草稿のなかに引用文献の走り書きを見たことがあるが、バンヴェニストは 1967 年に出されたジャック・デリダの『グラマトロジーについて』もいち早く読了し、メモを残している。恐るべき吸収力と速度をもって、バンヴェニストの「意味への問い」が深められていく様子、それを読者はこの講義から読み取ることができるだろう。

編者の隠れた意図が「バンヴェニスト・リバイバル」だということはすでに書いた。最後に付け加えるなら、このバンヴェニスト（再）読解、（再）発見の企ては、「教える人」としてのバンヴェニストの発見を通しても為されている。「ダイナミックかつ堅固な教え」と編者は述べているが（p.43）、バンヴェニストの発表された論文のみを目にしていた読者に、この講義の語りは新鮮で、より心に響くものとなろう。今ひとたび、再構成された架空の授業に参加し、力強い教えに耳を傾けたい。読者はそこから新しい「意味」が生まれてくるのを目にすることになるだろうから。